

[講演]

アスペルガー症候群と思われる大学生への支援

生島博之(教育臨床総合センター)

1. はじめに

平成13年度から提唱された小・中学校での特別支援教育は、その後、高校・大学へも波及し始めている。たとえば、平成19年には、学校教育法改正により、高校においても発達障害のある生徒への教育を行うことが明記されている。

一方、大学においては、学生相談の観点からの支援が始まっており、平成22年10月には東京大学において、「大学での発達障害者支援は少しずつ広がっており、富山大や筑波大などが相談に応じている」「同大では、年間15人程度が発達障害と診断されるという。専門のスタッフを置き、学生が相談しやすい態勢を作り授業の受け方や対人関係なども支持する。将来は『就活』対策にも取り組む」「支援室『コミュニケーション・サポート・ルーム』は学生相談ネットワーク本部に置き、臨床心理士または精神保健福祉士が対応。診断や治療は精神科医が行う」(朝日新聞、平成22年9月6日夕刊)という理念から、発達障害がある学生に対する支援室が立ち上げられている。

しかし、大学における発達障害のある学生への特別支援教育はまだまだ実施されてはならず、学生相談もやっとスタートしたといった状況である。そこで、今回はまず、「アスペルガー症候群」と思われる学生への支援について考えてみることにしたい。

2. 大学生における「アスペルガー症候群」の理解と対応

さて、滝川(2008)は、「アスペルガー症候群」

の2つの特徴について、「第一は、社会的な判断や行動のあり方を対人交流の積み重ねを通して学ぶことに乏しかったため、それらが身につけていないという『遅れ』そのものによって直接に生じる特徴です」「第二は、対人交流の力不足・蓄積不足を代わりに自分の頭(知力)でカバーしてきたという『適応努力』によって二次的に生じる特徴です」と述べ、これらの特徴により社会場面でつまづく6つの例を以下のように挙げている。

- ①好意をもった人についてまわる。気安く身体接触する。
- ②ものごとを相手の側に立って判断したり行動したりできない。相手のほうはどう考えているのか、どんな気持ちでいるのか、どんな状況に立っているかに頭がまわらない。
- ③自己コントロールが苦手。
- ④言葉を表現されたままに文字通りに受け取って、「言葉の綾」や「言外の意」を汲むことができない。
- ⑤社会的な場面での暗黙のルールや場の雰囲気を読めずに浮いてしまう。
- ⑥臨機応変や融通がきかず、こだわりが激しい。

そして、こうした学生への関わりにおける2つの留意点—①無理に直そう、無理に変えようとしないこと、②弱点にあわせた支援や教育の工夫をすること—を挙げ、前述の6つの例に対して、具体的な支援について丁寧に説明し、「以上、どの例をとっても、結局、安心のもてるまわりからの関わりがポイントだとわかります」「さて、以上はあくまで一般論です。平均的な一般像を類型として描けばおよそこうだろうという話で、具体的

な学生に接すればひとりひとりさまざまです。アスペルガー症候群だからこうといった杓子定規なマニュアル対応ではうまくいきません。一般論的な理解はもちろん大切ですが、診断にあまり囚われず、ひとりの青年が学生としてもつ能力や関心のあり方を教師の目で捉えて教育的な配慮・工夫をすることが第一で、これはアスペルガー症候群とは限らず、どの学生に対しても望まれることでしょ

3. 対人距離の取り方について

そこでまず、前述の最初の例—【好意をもった人についてまわる。気安く身体接触する】—についてさらに詳しく考えてみることにしよう。

このような例は、ストーカーやセクハラとして学生相談に上がってくることが多いが、滝川(2008)は、「距離のない接近が目立ちますが、これは幼児の対人行動なら普通のふるまいで、だれでもがしてきたことです(お母さんにつきまわってトイレまでくっついてゆく、手をつないでもらう、髪に触って甘えるなど)アスペルガー症候群と呼ばれる人のなかには、思春期・青年期になってやっと普通なら幼児期や児童期初期に通過する対人行動の発達段階に達するケースがあり、するとこのような行動がみられます。幼児がすれば普通のことでも、青年になって、とくに異性にそんな行動をとれば相手からは、無作法な態度、悪くすればストーカーやセクハラとみえてしまいます。この行動にはほんとうのストーカーやセクハラのような『性的アプローチ』や『猥褻行為』の意味はなくて、もっと幼いレベルの無心な愛着や好意や憧れのあらわれなのですが、社会的には『問題行動』となってしまうのです」等と説明している。

そして、このような例への教員の対応については、「まず、そうした行動が『無作法』や『セクハラ』や『ストーカー』ではなく、対人接近の仕方の発達の幼さゆえだとまわりが理解することが必要です」「非難するのではなく、ルール(約束ごと)として『どうふるまうべきか』『どうふるまっては

まずいいのか』を個々具体的に伝えることで、対人接近の未熟さをカバーしていきます。知的な理解力がありますから、信頼をもてる者がきちんと伝えれば、それを守ろうとします。ただ、友だちづきあいや男女づきあいの機微は、本来は知的に『頭で覚える』ものではなく、乳幼児期から始まる密接な対人交流を通して知らず知らずには『肌で覚える』ものなので、どうしても拙さが残るのはやむをえないところでしょう」等と、アドバイスしている。

一方、杉山(2002)は、言語性知能指数が145を示す青年との継続的な相談を振り返って、「彼は指導教官から、彼が大学の研究室で、同僚の女性に脅威を与える行為をくりかえしているといわれなき迫害を受け、大学で自由に動くことを禁止されているという。彼は、特に女性に対しては距離をとることを心がけていて、更に、『電車では痴漢に思われたいために細心の注意をしている』という。私は、親密でない人との間で許される接近距離はどの程度であるのかと、具体的な距離を示すように求めた。すると、彼は、約30センチの距離を示した！ 私は驚き、親密な人でもその2倍、そうでなければ1メートル程度は、必ず離れていることが必要であることを教えた。後に、なぜ30センチを許容範囲と考えたのか確認してみると、義務教育から、授業のときには、親しくない者でもその距離で机を並べていることを挙げた」等と述べ、「このような誤解があっても高機能者の場合、知的に高いがゆえに、全体としては生活の中で巧みに演じるすべとして身につけているので、トラブルが生じない限り、問題が存在することにすら気づかれないのである」等とコメントしている。

そこで、これらの例から明かになるのは、教員の方が、アスペルガー症候群の大学生に気づき、具体的な対人距離の取り方について、「このような場合には〇〇センチ以上離れなければいけない」「相手がOKすれば〇〇センチ以内に近づいてもよい」等と具体的な数値を示したり、物理的距離と心理的な距離の違いについて教え

ることも重要であると思われる。

また、浅草レッサーパンダ殺人事件(2001年)や町田市女子高校生殺人事件(2005年)を考慮すると、恋愛様(?)のトラブルに巻き込まれないように支援するためにもより具体的なアドバイスが重要である。

この点に関しては、当事者の体験から学ぶことが有効であり、例えば、ジェリー・ニューポート(2010)は、「当時、数学の講義でいっしょになった女の子と、1回だけデートしたんですよ。ぼくは楽しかったし、彼女も楽しんでくれたものとばかり思っていて、誘いました。13回か14回くらいでしようか。あんまり何度も誘うもんだから、彼女はとうとう、ぼくを避けるため、講義に来なくなってしまいました。そしたらある日、寮の仲間が来て『話がある』って言うんです。『ベッキーっていう子を知ってるだろ？ お前、14回も誘ったって気がついてる？ まだわからないのか？ ベッキーはきみに興味がないんだ』と言われました。それ以降は『三振したらアウト』というルールを決め、守ることにしました。彼女がぼくを避けるために単位をあきらめてしまったんだと思うと、申しわけなくなりました。人にそこまでさせてしまったなんて、かなり屈辱的な体験でした。ほかにも、人に注目されたくておかしい行動をするので、それを指摘されたこともあります」等と、自分の体験を紹介している。

彼はさらに、『三振即アウト』。だれかをデートに誘って、3回断られたらそこでやめましょう。世の中には、まだ30億人もいるのですから。われらがお仲間たちには、一人の相手が頭から離れなくて(それも、執着の動機からしてまちがっていることが多いんですけどね)、延々と誘っては断られている人がほんとに多いんです」「そうだ、もう一点。週末、デートする相手がいないくても、とにかく出かけちゃうことです。同じように相手のいない同性の仲間をみつけて、いっしょに遊ぶのもいいですね。映画に行く、野球観戦に行く、詩の朗読会に行く。さくっと動きだしちゃった方が、一人でじっとしているよりもずっと気分がいいですよ。

それに、そうやって外へ出てみることで、いろいろわかってくるもんです。相手なしで来ている人は、実はおおぜいいるって気がついて、きつとびつくりしますよ。もちろん、異性だっていっぱい来ています。一人で出かけるなんてかっこ悪いと思うかもしれませんが、逆です。むしろ魅力はアップしますよ」等と、アドバイスしている。

また、われらがお仲間一人一人に対して、「ある男性の場合もそうだった。彼は、相手の女の子が陸上部の練習を終えるころを狙って、更衣室の外で『偶然』出くわすように計らった。まあ、そういうのも、1回だけならいい。最初の1回がうまく行ったら、ラッキーというやつだ。相手も乗り気だったということだろうから。でも、毎日毎日これをやったら？ そして、向こうは会釈もしてくれなかったとしたら？ その場合、だれもが次の3つのことに気づいてしまう。その1、彼女はきみとつき合う気がないこと。その2、きみが毎日同じ時間に、同じ場所に現れるのは、偶然ではないということ。最悪なのが3つめ、きみは気のきかないやつで、遠回しに断っても納得してくれないということ。きみのやっていることはストーカー行為なわけで、さて、この先はどうなるのだろうか？ この男性の場合は、学校の警備班に通報されてしまった。ぼくはこれっぽっちも相手の女の子を責める気になれないね。気を持たせるようなそぶりをした覚えがないのにつきまとわれたのだから、不安になるのも当然だろう」「この種の『見るだけストーカー』タイプには、自分の行為がまわりの人にはバレバレだということがさっぱり理解できない人が多い。テンプル・グランディンの紹介していた例はすごかった。ある男性が、近所に住む女性に夢中になった。相手の自宅の向かいは畑だった。そこで彼は、畑のどまん中、彼女の窓の正面に立ってながめることにした—フットボールのヘルメットをかぶって。ヘルメットをかぶっていれば、だれにも自分の正体がわからないだろうと考えたのだ。たしかに、のぞき魔の正体はわからなかった。しかし、現行犯逮捕するには、氏名不詳で十分だった」等と述べ、「悲しいことだ

が、自閉症の人々は対人関係の場で交わされる合図を読みまちがいやすいために、相手が抱いてもない『好意』に応えようと、足も届かない深みへと自分から飛びこんでしまう危険性が高くなる。原因は合図の読みまちがいだけではない。年齢が進むにしたがい、遅れをとり戻すためなら何をしてもいいと思いつめるようになり、その必死さが仇になるのだ。中学校のときには、少なからぬ同級生が男女交際を始めていたというのに、自閉症の人たちの場合、20代かそれ以上になっても、セックスフレンドどころかデートの経験さえ皆無という人は珍しくない。自分だけが仲間はずれだという思いが長く続けば続くほど、無念さはふくらみ、判断は冷静さを失っていく。文句も言えずに利用されるがままになるのも、中毒患者のようにつきまとってしまうのも、どちらも病的な関係だ。この状態にはまってしまった人を『救出』するのは容易なことではない。まわりの人にできることといえば、いつでも話を聞く用意をしておくことぐらいだ。本人もたいてい、いつかは、『こんなのはそもそも<おつき合い>ではなかった』という現実をつきつけられることになる。その日が来たら相談に乗れるよう、近くにいてやってほしい。一度はどん底まで落ち、すべての希望を失い、だれかに相談する気にならないかぎり、病んだ関係からの出口を見つけることはできないのだから「忘れないでほしい。定型発達の人たちだって、だれかとの関係がこじれれば、同じように苦しむことは珍しくない。ぼくたちはただ、普通よりははまりこみ方が深く、無知ぶりも極端なだけのことなのだ」と、支援を訴えている。

ところで、<合図を読み間違える>こと、つまり、<相手の気持ちを察することができにくい>ことについては、アスペルガー症候群だけでなく、最近の若者の傾向でもあるとされており、河合(1992)は、ある高校生と父親との会話を紹介し、「日頃はほとんど直接、父親に話しかけたことのない高校生の息子が、帰宅した父親に向かって唐突に、『単車を買ってほしい』などと言うことがある。父親とするとそんなのは危険だと思うし、

話があまりに突然なので、『そんなに急に言っても無理だよ』と言う。ところが息子はあんがいしつこくて、どうしてもほしいとか、同級生のだれかれが持っていることなどを言いたてる。やはり無理だと言いつつ、父親は息子の気持ちも察して、まあ後で考えるから、ということで話が終わる。父親としてはほっとしていると、数日たって、息子は『あれ、考えてくれた?』。父親にすれば、息子は大体において父親の気持ちを察してくれたと思っているのに、息子の方は『後で考える』という父親の一言にしがみつки、しかも『買うことを考えると買ったのだ』とさえ思い込んでいるようなのである。こんな『話し合い』が、2、3回続いた後で、息子が『後で考える』と言いながら、何も考えていない!』と突発的に怒り出し、ついには、暴力事件になるときさえある。それほどひどくはならないにしても、これに似た親子のすれ違いは各家庭でよく起こっていないだろうか。父親の『後で考える』は、やんわりとした拒絶を意味しているが、子どもは文字とおりの肯定的な考えの継続として受け止める」等と述べている。

4. 字義どおりについて

そこで、次に、「アスペルガー症候群」の特敬の一つである<字義どおり>についても当事者たちがどのように述べているかを眺めてみることにしよう。

例えば、ニキ(2007)は、中学生頃の出来事として、「健康診断で視力検査があり、保健室の先生に『おうちの人に眼鏡を作ってもらいなさいね』と言われた。これが小学校のころだったら、『作ってもらいなさい』と言われたら、家族のだれかに自作させろという意味かと思っていただろう。そして、パパにはそんなものは作れないんじゃないかと思って、言い出せないで終わってしまっただろう。しかしさすがの私も、このころには『作ってもらいなさい』というのが眼鏡屋さん以外注せよという意味であることくらいはわかるようになっていた。母が帰ってくる私には、眼鏡を作ってもらえと言われた旨を伝えた。実際、自分が何と言

ったのかは覚えていない。だいいち、長すぎて覚えていられない。しかし、母の声は覚えている。結論を待ちかねていたのだろう。母は私の説明が終わらないうちに、押しかぶせるように叫んだ。『でもっ、黒坂は見えるんでしょっ！』『見えるよ！』と私は胸を張って答えた。そりゃそうだ。ちよつと近視が始まっているとはいっても、教室の前方に黒坂があることぐらい見える。いや、黒坂どころか、黒坂消しが置いてあるのだから見えちゃうぞ。ただ、黒坂に書いてある字が、ときどき読めないだけなのだ。母は大きく安堵のため息をつき『もう、びっくりさせないでよお』と言った。そんなわけで私の眼鏡は作られないことになった』と述べている。

また、ニキ(2007)は、中学生や高校生の頃の職場体験について、「私の場合『空想を空想だけで終わらせて実現させなかったら、うそつきになる』『始める前にやめるのは、始めてすぐにやめる以上に意思薄弱』と思ったのが『極端な思いこみ』だった。今だったら、中学生や高校生向けに短期間の職業体験などのプログラムがあるけれども、昔の私だったら、怖くて参加できなかったかもしれない。だって、体験プログラムで体験した職業は、一生、続けるのが意思の強い証拠かとかんちがいしていただろうから。そんな重い選択になると思っているのは、うっかり参加できない」「今思うと、『一日体験』というコンセプトが、理解できていなかったらしい。自閉症者にとって、楽しい想像力、道楽想像力は、パワフルなだけに、扱いがむつかしいものだをつくづく思う。空想を乗りこなせず、ふり回されて失敗するのは、自分の想像力とのつき合いが稚拙だからなのだ」等と述べている。

さらに、ニキ(2007)は、外泊や化粧に関する体験について、「外泊はいけませんと言われていて、グループ旅行やキャンプはいつも一人だけ不参加だったからホテルや民宿に泊まるのは無理だと思っていたが、夜行列車や夜行バスの車内で必死に眠らずに起きているなら、宿泊したことにはならないと思った」「大学生のころ、雑

誌のコスメ特集に『女性が化粧もせずに素顔をさらして外を歩くなんて犯罪です』と書いてあるのを読んで、『しかし、最初の化粧品はどうやって買いに行けばいいのだろうか？』と考えるものだ。『そうだ。たしか、天袋の衣装ケースのどれかに目だし帽があったはずだ！』と思い出して、探したけれど、見つからなかった。見つからなくて、良かったのか悪かったのか。見つからなかったおかげで、しばらくどこへも行けなくて、食糧が尽きて困ってしまった。でも、見つかっていたら、思いっきり怪しい格好でコンビニに押し入ることになっていたかもしれない』と述べている。

一方、藤家(2007)は、親の期待などについて、「私の個人的な体験から言うと、親の期待ほどありがたい迷惑なものはない。親の期待を裏切っても、死刑にならないとか、親は自分の理想を言うてるものだから、私は知らなかった。脳のファイルから抜け落ちていた。親の期待にそえなくてもいいのだと知ったのは、わずか2年前であった」等と述べている。

さて、滝川(2008)は、前述の4つ目の例一【言葉表現されたまま文字通りに受け取って、「言葉の綾」や「言葉の意」をくむことができない】—として、「たとえば『どうぞ、いつでも遊びにいらしてください』という言葉の意味は、“あなたを親しい知人と思っていますよ”という挨拶で、『いつなんどき遊びにきてもいい』という許可ではありません。しかも、ややこしいことに、いつも社交挨拶とはかぎらず『ぜひとも遊びにきてほしい』という掛け値なしの言葉のときもあります。どうそれを読みわけたらよいのでしょうか。こうした言葉の綾を読みわけける力は、辞書や文法書で勉強するだけではだめで、実際の対人交流と社会経験を深く積み重ねばなりません。その積み重ねが乏しいのが、アスペルガー症候群です。しかも、まわりに倣うかわりに自分の頭で考えるという対処法の弱点がこうゆうところで露呈されます。頭で(論理的に)考えるかぎり、『いつでも遊びにいらして』という言語表現は、字義どおり、『何どきでも遊びにきて欲しい(遊びにきてよい)』という意味でし

かないはずだからです。でも、夜中に訪れたら『常識』を疑われます。仮に辞書と文法書だけで学んだ外国語でネイティブと日常のコミュニケーションをしていたら、これに類する齟齬にであらうでしょう。母国語でそれが起きるので大変です」等と述べ、アスペルガー症候群への対応として、「言葉どおりに通じる言葉でものごとを伝える配慮が必要です。あいまいな言い回し、多義的な表現、反言や比喻は避けます(これを意識すると私たちの日常の言葉がいかにこうしたものに溢れているかに気づくかもしれません)。できるだけ論理的にしていねいに伝えます」「メッセージがまっすぐに伝わる工夫として、口頭の言葉だけでなく、板書やメモなど、文章で伝えることが役立ちます。話し言葉よりも書かれた文章のほうが論理性が高くなります(日常の話し言葉を録音してテープ起こしをしてみると文法的にも論理的にもいかにあいまいで不整合か気づくでしょう)、その上、読み返して確認できるからです」等と、アドバイスしている。

これらの点を参考にすると、教員がゼミの学生さんの論文指導をする際には、「困ったらいつでも私の研究室に来たらいいよ」等と伝えるのは好ましくなく、「〇月〇日の〇時に研究室に来て下さい。〇分間指導します」等と明確に伝えると同時に、メモ(予約カード)を手渡すことが適切であると思われる。

5. 説教ではなく、わかりやすい「言葉」と「態度」でナビゲートを

さて、次には、「アスペルガー症候群」の大学生が、学習場面などで抱えている困り感について考えてみることにしよう。

鶴田(2010)は、全力で講義を聞いて疲れ果ててしまう発達障害が疑われた学生のカウンセリングの経過を報告し、「学生が一番悩んだのは、ゼミでの学習と人間関係であった。分担して準備しなくてはならないグループ発表で、他の学生が彼のまじめさにつけこむように、彼に多くの分担を押しつけてくるのが度々起こっていた。

また、レポートでは、担当教員に『主語、述語をはっきり書くように』と指導されたが、うまく書けず、それを厳しく指導されて、ますます混乱してしまった。指導のたびに文章が崩れていき、ゼミに行くことが怖くなった」「高校までの教科書を中心とした勉強スタイルでやっていけないことは明らかだが、彼は、大学でも、機械のように勉強をこなすスタイルを保持しようとした。全力で講義を聞く彼が、疲れて倒れてしまうのは当然だったかもしれない」「履修登録の時から混乱したが、自分の考えで登録して、いくつかの必要な科目の履修登録ができなかった」「学生は、小学校以来のいじめで、中学の時に『壊れ』てしまい、それ以後自尊心もなくなり人も信用できなくなったと語った。彼は、いじめられるのは弱い自分のせいととらえ、高校では感情のスイッチを切り、機械のように勉強をこなし、弱いところを見せずにやってきたという。また、彼は、小さい頃からひとり遊びが多く、1つのことにこだわるが多かったと述べた。相談室では度を過ぎた丁寧さで接するかと思えば、はっとするような身体距離でカウンセラーの横に立つことがあった」と述べ、教員に対して、早期のきめ細やかな関わりの大切さを指摘し、「一般に発達障害を疑われる学生は、学業上『講義についていけない』『ノートがとれない』『テストができず、課題、単位取得が予定通り進まない』『履修手続きが困難』といった問題を示すことが多い。また周囲からは、『一生懸命取り組んでいるが、成果が上がらない』『授業中、突然、的はずれの質問をするなどの問題が指摘されることが多い。このような学生に、発達障害の疑いがあるのではないかと考えてみることは、(レッテル貼りにならないように注意しながらも)避けて通れないことである。そして、学生の大学入学に至るまでの経緯を知り、教職員から紹介してもらったり、何かのことをきっかけに、知り合いになるなど、できるだけ早期に、カウンセラー自身が学生に積極的にアプローチする方策を考えることが必要だと思う。とくに、履修登録時に学生が示す混乱に気づくことが大切だと思

う。人に質問をするのが苦手な学生が、思い込みによって登録して、そのまま学期末まで気づかれず、留年などの事態となってしまうことが少なからずある」等とアドバイスしている。

また、松瀬(2009)は、「アスペルガー症候群」の大学2年生女子Aとのカウンセリングの経過について、「初回面接時にAは、大学では友人と話がかみ合わないこと、友人に話しかけられたときにどう対応したらよいかわからないこと、説明をすることができないこと、人の顔の特徴がわからないため、人の顔と名前を覚えるのが苦手であることを訴えた。そして、『友だちが冗談を言ってもそれが冗談だとわからない』『嘘も冗談も全部本気にしてしまう』『クラスメートの顔がわからないので、学内ですれ違っても無視してしまう。だから友だちができない』と結びつけて説明した」「さらに大学生生活で困ったことはないかと話を聞いていくと、『方角がわからないので講義の開始時間に遅れます。中学・高校時代も、教室移動や体育の時間のグラウンド内での移動に不安があったため、前の人の顔を見て、とにかく遅れないようについていった』『先生の話が抽象的になっていくと、何を話しているのかわかりにくい』と述べた」等と報告したり、Aのエピソードとして、「高校の時、家庭科の調理実習で『猫の手で切っただね』と言われて、ひどいことを言う先生だと思ってその先生に激しい嫌悪感を抱いたことがあった」「大学1年生の時、担当教員が講義内で、ある課題について『友だちと話し合うように』と指示したところ、日ごろ、目立たない生徒であるAが教壇に歩み寄り、『私、友だちがいません』と発言したことがあった。課題レポートの提出を求められた講義で、期限までに出せなかった学生全員に対して、担当教員が、研究室まで来るようにと呼び出しをしたことがあった。その折り、Aは、『期限までに書けない人は単位をあげない』と言われたから、それでもいいと思って出さなかった。それなのに、呼び出しをされて、しかられた。何てひどい先生だろう』と話した」等と述べ、「アスペルガー障害の学生にとってディスカッションの多

い講義に参加することは困難を伴うので、学生が受講科目の選択をする前に、教員側がシラバスや初回講義でより具体的に説明することがのぞまれる。また、レポート課題の提示についても、広範すぎる感じがして書き始めることができない例や、見当違いなことを論点としてしまうこともあるので、学生が課題の意味を質問しやすいような雰囲気を作る必要がある」「話すときは、わかりやすい言葉で、静かにゆっくりと話すことも大切である」等とアドバイスしている。

次には、さらに具体的に考えるために、当事者の声に耳を澄ましてみることにしよう。

例えば、佐々木(2004)は、「要するに、自分独自の世界に他人が無断で入り込まれた時の対応ができないので、それをナビゲートするみたいに、助けてほしかったのです。『これ・それ・あれ・どれ』などの指示代名詞や『向こう』などと言われても本当にその求められている“意味”がわからないのです。指示代名詞や『向こう』などという言葉を知ると、私は外国語を聞いているような感じに陥ってしまいます。授業中も私の知らない“言葉”で授業を聞くのが当り前のようにされました。指示代名詞や『向こう』という言葉をも具体的に説明してくれていたならパニックを起こさずに落ち着いて対処できたと思いました」「冗談と本気の違いがわからないので、いちいち『今の話は冗談ですか？本気ですか？』と大人になった今でも尋ねないと会話の輪に入りにくいのです。会話のキャッチボールのタイミングを小学校の頃から教えてくれれば違うのかもしれない」「小学校高学年時代、私がいまにも周りとは違うので、その“違い”を先生に相談したら、道徳の授業が『私の性格改造授業』になってしまいました。その授業内容は私の欠点をクラスの全員に言わせ、私が『わかりました。今から全部なおします。問題行動を起こさないようにします』と言わないと自分の席に座らせてくれないという授業でした。黒板一杯に『わがまま』『ネクラ』『生意気』『協調性が足りない』『すぐ泣く』『自分の思い通りにならないと嫌な顔をする』『自分勝手』『努力が足りない

い『何を言っているのかわからない』『性格が悪い』『何を考えているのかわからない』等を書かれました。周りとの違いの理由を知りたくて先生に相談したのに、こんな大騒ぎになるとは思いませんでした。学校は別の惑星だと確信してしまった瞬間でした。中学校に行ってから家以外の外の世界は別の惑星に行っているという感覚が抜けず、自分ひとりで苦しんでいました。死んだ方がいいのではないかと思うようになり、いかに楽にして死ぬかを毎日考えるようになりました。中学校を卒業すると半ば引きこもり生活を送りました」等と、辛かった体験を語り、「普通の人にとっては当り前のことだから同じように私にもわかると思っている人がほとんどです。口で言ってもらっても『ここ』とか『そこ』とかあいまいな表現で言われても家族でさえ会話にならないことが多いのです。私としては具体的で明確な固有名詞で言ってもらえるとありがたいです。当り前のことがむずかしく感じられることもあるので、些細なことでも質問をしないと理解できない場面が出てくるのです。些細な当り前なことでも、“質問”いう形でないとう理解できないことを『バカだな』とか『当り前のことを聞くな』などと言わないでほしいのです。理解したつもりでいるととんでもない結果になるのは目に見えているのですから。人と違う反応をしたとしてもより具体的でかつ明確でわかりやすい言葉で話してもらえただけでもだいぶ反応が違ってきます。私たちには私たちの“言葉”や“認知方法”があることをわかってほしいのです。私が実際に会った自閉症スペクトラムの人たちは独自の“世界”をもった素晴らしい人が多いのです。自分なりの学習スタイルや“文化”を持っている人が多いけれど、彼等のスタイルに合わせてくれれば、“文化摩擦”は少なくなると思います。私のスタイルを尊重しつつ、この場面は少し違ふなどとナビゲートしながら一緒に考え、私がわからなかったり戸惑ったりしたら、わかりやすい“言葉”や“態度”で示してくれたら、痙攣などのパニックは少なくなると私は思うのです。少しでも本人の特性やこだわりなどをわかっ

たうえで、通訳やナビゲートをしてくれたらどんなにありがたいかをつくづく思うのです」「私は常に修正してくれる通訳やナビゲートがいない』『常識がない』と言われる人間なのです。通訳やナビゲートを頼らないと予定外の変化などに対応できないことが多いのです。今までの経験データを元に行動する傾向の強い私には、通訳やナビゲートが必要なのです。新しいことに挑戦する時には通訳やナビゲートなしではパニックを起こし、空間感覚さえもなくなってしまうことは目に見えているのです」等と、訴えている。

6. 得意な分野とこだわりを生かすかわりの大切さ

さて、次には、「アスペルガー症候群」の大学生が抱えているこだわりへの支援について考えてみることにしよう。何故なら、これらの点がキャリア・ガイダンス(職業選択指導)と大きく関連していると思われるからである。

そこでまず、「アスペルガー症候群」のこだわりについて考えてみると、滝川(2008)は、前述の6つ目の例—【臨機応変や融通がきかずこだわりが激しい】—について、「言葉を文字どおりにとる傾向にも、暗黙のルールの読めなさにも、よくいえば『生真面目さ・真正直』が、悪くいえば『硬直性・融通のきかなさ』が見て取れます。これは、幼少期からあまり人に頼ったり人に倣ったりせずに、自分ひとりの頭で考えたりしてきた人たちに、しばしば見られる傾向です。このため、アスペルガー症候群と呼ばれるタイプの子どもたち・人たちは、外見はマイペースで気ままに行動しているかにみえて、実際にはうまく処しきれないことに囲まれて高い不安と緊張を生きています。これは忘れてはならないことです。一見ささいなことでパニックや混乱を起こしやすいのも、高い不安緊張を抱えて生きているがゆえです」と説明し、このような例への教員の対応について、「社会的な状況の理解や対処法における複雑微妙な綾がうまくこなせないまま生きれば不安は(私たちの想像以上に)高いものです。慣れたパ

ターンが崩れたり変わったりすることや新しい事態に対するおそれはとても強く、それが極端なこだわりや固執になってあらわれるのです。したがって、この人たちにとって不意打ち的な事態を、できるだけ避ける配慮が助けとなります。大学はカリキュラムひとつをとっても自由度が高いだけにこのタイプの人たちには複雑さが増しますし、高校とちがい、学年が上がるにつれて授業形態や取り組み方のパターンが変わりますので、それが大変さをもたらすことがあります。先の見通しがもてることが安心につながります。ものごとの予定やスケジュールは事前にていねいに教える。できるだけ変更を避け、やむなく変更があれば前もって伝えるなどの工夫が役立ちます。新しい状況や取り組みが必要なときにはアシスタントのサポートが不安を減らします」等と、アドバイスしている。

そこで次には、「アスペルガー症候群」のこのように＜こだわり＞に良い面を見つけ出し、キャリア・ガイダンスへと結びつけるためには、得意な分野を生かす関わりが大切になると思われる。これらの点について、当事者である大橋(2004)は、「僕は計算がまるでできない一方で、子どもの頃から『表現する』ことが得意だった。しゃべること、歌うこと、楽器を演奏するといった自己表現は教わらなくてもよくできた。その源は、好きな読書や映画を見ること、音楽を聴くことを幼い頃からたくさんたくさんしてきた成果と、両親が僕の苦手なところを一切責めずにほめまくってくれたからだ。だから今、たくさんのおこを吸収しそれを血肉とできたおかげで、自分が好きな得意な分野で職業(ディレクター、ライター)に就いている」等と述べ、小・中学校時代の思い出について、「小学校時代—僕の人生で一番つらかった頃だ。なぜ、あれだけいじめられていたのか。成績が悪かった、それだけじゃない。要は、僕はクラスの中で変わっていたのだ。明るかったり、暗かったり、気分の差は激しいし、気に入らなければ突然爆発して窓ガラスを割ったり、イスを投げたり…、片づけはできないし、机の中はかびたパン

がごろごろ…。これじゃあ、まわりの友だちも嫌だったろう。風呂に毎日入ることも、とにかく規則正しい生活をするのも、歯磨きすることも、とにかく規則正しい生活をするのが苦痛でたまらなかった。でも、それが僕には普通だった。『普通じゃない』とある日、気づいても、自分ではなかなか直せない。勉強も『今日こそは』と毎日思うけれど、先生の言うことは意味不明なことばかり。片づけもしたいけど、どうしていいかわからない。友だちは毎日、僕を殴ったり蹴ったりして、それが相当面白いらしい。もう、袋小路である。そんな時、先生までも僕を責める。『できないのはやる気がないから』と言う。『努力が足りない』『ふぎけるな』とも言われた。別にふざけてなんかいいぞ!! やる気はいつでもあるぞ!! 僕にやる気がない、努力が足りない、と言うなら、まわりの友だちは、よっぽど僕の何万倍も努力しているのだから」「ひどい先生ばかりでもなかったんだな、これが。中学校時代の校長、T先生。中学3年の時だ。校長室の掃除をしていたらT先生が、『君が大橋君か。君、面白い生徒なんだってね』と言う。『面白い』と言われても、自分で自分が面白いかどうかは、わからない。『はあ』なんて曖昧な受け答えをしていると、T先生は驚くべき提案をしてきた。『君の志望校は定員割れを起こしているから、少々成績が悪くても大丈夫だろうが、数学が0点じゃ、合格はできないよ。せめて式の計算ぐらいできないと…。君は知らないだろうけど、僕は山口県でも数学ではかなり有名な先生だから、明日から毎日、校長室に来なさい。僕が教えてあげよう』と言う。びっくりである。校長先生である。校長先生と言え、学校で一番偉い人である。授業をしている姿など、見たことがない。その校長先生が、勉強を教えてくれるという。それから、T先生は、式の計算の仕方を、グラフを書きながら、ゆっくりと教えてくれた。頭では計算はできないが、グラフを書いてえんぴつで数をなぞれば、僕でも何とか計算ができるようになった。校長先生に、本当に感謝である。おかげで高校に進学できたのだ。その先生が、最後の

マンツーマン授業で僕に言った言葉がある。『大橋君、君に教えたのはテストに受かるための勉強だ。本当の勉強じゃない。本当の勉強は、もっと奥が深くて深遠なものなんだ。成績などで測れるものでもない。いつか、そのことをわかってほしい。』この言葉は、僕の大きな胸に突き刺さった。僕が高校から大学に進学できたのも、この先生の言葉があったからである。T先生は、僕が高校に入ってからいろいろ気にかけてくれ、電話で学校に様子を聞いてくれていたらしい。僕が新聞記者になったことを人伝に聞き、『彼の個性が生かしてよかった』と心から喜んでくれたらしい。「T先生は決して押しつけなかった。T先生は初日、まったく勉強を教えなかった。自分の自慢話と、君は個性がある、なかなか面白い、というほめ言葉だけだった。僕に『この先生なら大丈夫かもしれない』という余裕と安心感を与えてくれた。僕らにとって、急に無理なことを言われることほど、無理なことはない。授業中、何が困ったって、その情報量の多さだ。1時間の間、ハンパじゃない情報量が黒坂に書かれ先生によって説明される。そのスピードは、他の人にとって普通でも、僕らではとてもじゃないけどついていけない。先生たちがそういったことに気づいてくれて、僕らの中にある懐疑心を取り除いてくれれば、『教わる恐怖症』だって治まるのだ。だから、僕も、あれだけ苦手だった数学に、あの時だけは立ち向かえたのだ」等と述べている。

それゆえ、当事者の声を参考にし、星野(2010)が、「アスペルガー症候群」の才能を生かすための3つのポイントについて、「このように歴史上の偉人や天才には発達障害を抱えていた人が少なくありません。日本の歴史を振り返ってみても戦国時代に『天下布武』を掲げて登場した織田信長をはじめ、エレキテルで有名な江戸時代中期の奇才・平賀源内、幕末に誰も思いつかなかった薩長連合を結ばせた坂本龍馬、実に19カ国語を操ったという明治の博学の巨人・南方熊楠など発達障害であったとされる偉人や天才はたくさんいます。このように、発達障害の

ある人はまさに磨かれていない原石そのもので、彼らの長所を上手に生かせるなら、水を得た魚のように、その才能を開花させる可能性があるのです。では、実際に発達障害者の才能を生かすには、どうすればいいのでしょうか？何より大事なことは、①発達障害者の特性と適職を知る、②専門教育でサポートする、③就労支援とキャリア・ガイダンスに努める、という3つのポイントです」等と述べていることを実践することが重要であると思われる。

また、クリストファー・ギルバーク(2003)が、「アスペルガー症候群の人は、ほぼ必ず、大きな障害を全面的に、あるいは部分的に補うような優れた能力を持っている。この症候群の中核的特徴のほぼすべてに、『肯定的』な側面がある。一般的IQの高さ、粘り強さ、頑固さ、完璧主義などは、アスペルガー症候群の人がしばしば示す優れた能力の一例に過ぎない。診断やフォローアップの際にこうした能力に着目し、各人が最適な教育・職業訓練を受け、全般的発達を遂げられるようにすることが、常に重要である」等と指摘していることも参考にすべきであると思われる。

一方、前述の佐々木(2004)は、自分の職業体験を振り返り、「うまくいった仕事は倉庫内の軽作業でした。最低限の人間関係ですむし、人ではなく物を扱う仕事だし、常に自分のペースで働けるのが最大の魅力でした。私がうまくいく例は工場や倉庫内の軽作業であることがわかりました。ただ工場や倉庫内で二つ同時進行や作業中なのに次から次へと用件を言い渡されるとよく混乱を起こしていました。ある工場で働いていた時、作業内容はとてもよく、自分のペースで働けると思っていたのに、次から次へと用件を言い渡されたり、その時している作業を中断して別の作業を言い渡されると混乱を起こし、要領の悪い子というレッテルを貼られ、試用期間内で止めることになりました」等と述べている。

それゆえ、キャリア・ガイダンスにおいては、星野(2010)が、発達障害者の特性と適職に関して、「発達障害者は、視覚的な思考に長けている人

が多いことも知られています。自分の考えを言葉でうまく表現するのは苦手ですが、具体的で視覚的なイメージに置き換えられるのは一般の人よりはるかに得意です。このため、彼等には、カメラマン、イラストレーター、スタイリスト、漫画家、画家、建築業全般(建築・設計技師、大工など)、コンピュータ・プログラマー、CGアニメーター、広告関係全般、ファッションやグラフィックなどの各種デザイナーといった職業が向いています。このほか、彼らの大きな特長の一つである『ひらめき』を生かすには、科学者、研究者、発明家などが適職ですし、対人関係や組織の人間関係などにあまり煩わされることなく専門的な知識や技能を生かすには、税理士、会計士、図書館司書、調律士(ピアノなど)、校正者、翻訳家、自動車整備士などが向いていると思います。「逆に発達障害者に向かない仕事としては、高度な協調性や熟練した対人スキルが要求される営業関係や接客関係、優れた管理能力が要求される人事・経理・総務関係、ミスが重大事故に直結するような交通・運輸関係(運転士、パイロット、航空管制官など)、複数の要求を同時にこなす必要がある飲食関係(ウェ이터、ウェイトレス、コックなど)、フライト変更などの不測の事態への臨機応変な対応が求められる旅行関係(代理店など)、日々相場がめまぐるしく変わる金融関係(株、為替、先物など)、常に柔軟な対応が要求される各種の予約係や顧客窓口(コールセンターなど)、などを指摘することができます」等と述べていることを参考にすることも大切であると思われる。

7. おわりに

さて、これまでのところでは、「アスペルガー症候群」が困り感を抱えている<対人距離の取り方>や、<合図を読み間違える>ことや、<字義どおり><こだわり>などへの支援のあり方について考えてきた。だが、枚数の制限もあるため、次に、「アスペルガー症候群」の大学生への支援のポイントについてまとめてみることにしよう。

この点について、星野(2010)は、発達障害の

ある学生が抱える問題として、「①対人関係や大学での生活上のトラブル(友人とうまく付き合えない、約束を守れない、借りたものを紛失する、孤立している、サークルでトラブルを起こすことなどが多いこと)、②学業上の問題(講義についていけない、ノートが取れない、レポートなどの提出期限を守れない、科目履修の管理が困難、授業中に的外れな質問をして授業を中断するなど)、③行動、情緒面の問題(物事が思うようにいかないとパニックになる、自己主張が強く自制心に欠ける、気持ちが落ち込みやすい、自尊心が低く自分はダメ人間だと訴える、感情の起伏が大きい、カッとなって暴言を吐いたり暴力を振るうなど)、④就労の問題(進路が決まられず就職活動がうまくいかない、面接で断られる、やりたい仕事が見つからない、将来に対して漠然とした不安がある、高い対人スキルを要求される職種を選ぼうとして失敗を繰り返すなど)」の4つの点を指摘し、発達障害のある学生への教育上の特別な配慮について、「たとえば大学では、発達障害のある学生への支援策として、①カウンセリングを行なう、②必要な単位や履修科目、時間割などを一緒に考える、③別室で補習を行い講義に代える、④定期試験に別室を用意する、⑤講義中の一時退出を認める、⑥クールダウンのための部屋を用意する、⑦ワイヤレスヘッドフォンを着用し、マイクを通した教員の声だけ聞こえるようにする、⑧講義を録音し繰り返し聞けるようにする、⑨文字を読み上げるパソコンソフトを利用する、⑩デジタルカメラで坂書を撮影する、⑪口頭試問などに解答方法を変更する、⑫試験をレポートで代替える、⑬レポートの提出期限の延長を認める、等の学習支援を行っているほか、日常生活の支援として自己管理や社会的スキルを指導したり、就職支援として履歴書の書き方や職業適性の指導、ハローワークなどの外部リソースやキャリアカウンセラーとの提携、障害者手帳の取得指導や地域の障害者職業センターの紹介などが行われています」等とアドバイスしている。

最後に、重複する点もあると思われるが、梅永(2007)が、『当事者の声から学ぶこんなサポートがあれば！ 10の提案』として、「①発達障害本人に合った学習方法を考慮する、②教師に対して発達障害児の理解・啓発を進める、③マイナス面を見ずに、プラス面を評価する、④発達障害をオープンにする、⑤周囲への発達障害に対する理解をすすめる、⑥相談できる場所をつくる、⑦保護者を含めた相談を実施する、⑧特別支援教育を幼児期から大学まで実施する、⑨発達障害に詳しいジョブコーチを要請する、⑩発達障害者の集まる場を作る」ことをアドバイスしていることを紹介しておきたい。

文献

- 秋山邦久(2007):軽度発達障害者への就労支援事例—援助関係の形成と効果的援助のあり方について—。文教大学大学院臨床相談研究所紀要, 12, 3-11.
- アン・パーマー(2007):発達障害と大学進学—子どもたちの進学の夢をかなえる親のためのガイド—。腹巻智子訳。クリエイツかもがわ。
- クリストファー・ギルバーク(2003):アスペルガー症候群が分かる本—理解と対応のためのガイドブック—。田中康雄監修。明石書店。
- 藤家寛子(2007):自閉っ子は、早期診断がお好き。花風社。
- 星野仁彦(2010):発達障害に気づかない大人たち。祥伝社。
- 生島博之(2008a):発達障害児の声に耳を澄ます特別支援教育。教育臨床事例研究, 19, 愛知教育大学教育実践総合センター, 12-21.
- 生島博之(2008b):コミュニケーション・スキルを育む特別支援教育。教育臨床事例研究, 20, 愛知教育大学教育実践総合センター, 1-17.
- 生島博之(2009):アスペルガー症候群と感覚過敏(1)。教育臨床事例研究, 21, 愛知教育大学教育実践総合センター, 2-15.
- 生島博之(2010):アスペルガー症候群と感覚過敏(2)。教育臨床事例研究, 22, 愛知教育大学教育臨床総合センター, 1-14.
- 河合隼雄(1992):対話する人間。潮出版社, 102-104.
- 松瀬留美子(2009):アスペルガー障害学生への青年期支援。心理臨床学研究, 27 (4), 480-490.
- 村瀬学(2006):自閉症 これまでの見解に異論あり!。ちくま書房。
- ジュリー・ニューポート&メアリー・ニューポート(2010):アスペルガー症候群 思春期からの性と恋愛。ニキ・リンコ訳。クリエイツかもがわ。
- ニキ・リンコ(2007a):自閉っ子 えっちらおっちら世を渡る。花風社。
- ニキ・リンコ(2007b):自閉っ子におけるモンダイな想像力。花風社。
- 大橋広宣(2007):得意な分野を伸ばすことで自分の好きな職業につけた。梅永雄二編, こんなサポートがあれば! ②。エンパワメント研究所, 35-43.
- 坂井聡(2007):発達障害と学生相談。精神療法, 33(5)。金剛出版, 583-589.
- 佐々木加奈(2004):説教ではなくナビゲートを! 梅永雄二編, こんなサポートがあれば! ①。エンパワメント研究所, 89-101.
- 佐藤幹夫(2005):自閉症裁判—レッサーバンド帽男の「罪と罰」—。洋泉社。
- 杉山登志郎(2002):アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート。学習研究社。
- 滝川一廣(2008):大学生における「アスペルガー症候群」の理解と対応。そだちの科学11, 124-132.
- 鶴田和美ほか編(2010):事例から学ぶ学生相談。北大路書房, 23-28.
- <本論文は、平成22年の12月に教育臨床総合センターでおこなわれた連続講座「発達障害を有すると思われる学生への支援・対応について」で行われた講演に加筆訂正を加えたものである。>